

第十四回 密計みつげいを献じて黄蓋刑こうがいを受く、龐統巧ほうとうたくみみに連環れんかんの計さずを授く

— 赤壁前夜 (三) —

周瑜は諸葛亮と曹操軍に対する作戦を相談をし、お互いの考えを掌てのひらに書いて見せ合います。すると掌にはどちらも「火」と書いてありました。諸葛亮と考えが一致した周瑜は、火攻めで曹操を破ることを決意します。

一方の曹操ですが、周瑜の策略に引っかけかかって蔡瑁さいぼうらを殺し、今また十万本の矢を奪われて怒り心頭です。そこで、蔡瑁の族弟ぞくていの蔡中さいちゆうと蔡和さいわを偽って投降させ、呉軍に送り込みます。しかし、周瑜はすぐにこれを偽装と見抜き、二人を利用して「苦肉くにくの計」を成功させようとしています。

(本文抄)

周瑜がその夜、陣幕のなかになると、とつぜん黄蓋こうがいが会いに来た。

周瑜は言った。

「公覆こうふく(黄蓋の字) どの、夜遅く来られるとは、何か良い策を思いつかれたのでしょうか」

「敵は多勢、わが方は無勢、火攻めをかければよろしいでしょう」と黄蓋。

「誰が火攻めの計を勧めたのですか」

「自分で考えたことで、人に教えられたものではありません」と黄蓋。

「私もそう思い、そのために、偽って降参した蔡中と蔡和を手もとに留め、わざと内通させようとしているのです。ただ、残念ながら、わが方から曹操に偽って降伏してくれる者がおりません」と周瑜。

「私にやらせていただきたい」と黄蓋。

「少々、痛い目にあわないと、向こうは信用しそうにありませんが」と周瑜。

「私は孫氏の厚恩を受けてきた者です。どのような目にあつても、恨むものではありません」と黄蓋。

「あなたがこの『苦肉の計（わざと味方から肉体的苦痛を受け、敵を信用させて偽装降伏する計略）』を引き受けてくだされば、このうえない幸いです」と、周瑜は頭を下げて言った。「私もまた、命を惜しみません」と黄蓋は言い、帰っていった。

（解説）

若き孫権のまわりには、周瑜や魯肅など兄孫策以来の盟友ともいうべき有能な臣下や、程普や黄蓋など父孫堅以来の多くの宿将が集まり、趙翼が「意気を以て相い投ず（『二十二史劄記』）」と評したように、主君を守り支える強い人的結合を誇っていました。孫権もまた、陳寿が「身を低くし辱を忍び、才能ある者に仕事を任せ綿密に計略を練るなど、越王勾践と同様の非凡さを備えた、万人に優れ傑出した英雄であった（『三国志』呉主伝）」と評したように、人の意見に耳をかたむけ、人を活かし、臣下の力を結集していきま

す。孫権は「総合力」を生かせる指導者でした。

このとき、黄蓋が、自分の命をかけて「苦肉の計」を献じます。

（本文抄）

翌日、周瑜は諸将を本陣に集め、諸葛亮も同席した。

周瑜は言った。

「曹操は百万の大軍を率い、三百里以上も陣営を連ねており、とても一日では打ち破れない。これから、諸将にそれぞれ三か月分の食糧と秣を支給するから、戦いにそなえてもらいた

そのとき、黄蓋が進み出て、

「三か月はおろか、たとえ三十か月分の食糧と秣でも、役にたちません。今月中に撃破しようとするなら、撃破できるだろう。今月中に撃破できないなら、張子布（張昭のこと）殿がいわれたように、降伏するまでだ」

周瑜は激怒して、「私は殿のご命令を受け、曹操を打ち破ろうとしているのだ。もう一度、降伏するなどと言う者がいれば、必ず斬る。今、そんなことを言つてわが軍の士気を挫くとは。みなの前で首を斬る」と言い、黄蓋を斬るよう左右の者に命じた。

黄蓋も腹を立てて言い返した。

「私は破虜將軍（孫権の父、孫堅を指す）に従つてこのかた、すでに孫氏三代に仕え、縦横に戦つてきた。おまえなんぞの青二才とは違うぞ」

周瑜は腹を立て、すぐ斬れと命令を下した。

と、甘寧が進み出て言うには、「公覆どのは呉の譜代の臣です。なにとぞお許しください」周瑜は「余計なことを言つて、軍律を乱す気か」と怒鳴りつけ、甘寧を叩き出せと命じた。諸将はそろつて、「黄蓋の罪はなるほどもつともと思ひますが、どうか都督には、しばらく罪をお見逃しください。曹操を打ち破つたあとでも遅くはありませんまい」と頼んだ。

周瑜の怒りはおさまらなかつたが、一同が必死で懇願したため、「首を斬るところだが、諸將の顔を立てて、今しばらく許すことにしよう」と言った。

かくて、周瑜は、黄蓋を引き据すえて、その背中を杖で百回打てと命じた。諸將はまた必死になつて許してやつてほしいと懇願したが、周瑜は彼らを引き下せると、ただちに杖刑じょうけいを命じた。

かくて黄蓋の衣服を剥はぎ取つて、杖で背中を五十回打たせた。

諸將がまたも必死になつて許してほしいと哀願あいがんしたところ、周瑜は黄蓋を指さしながら言つた。

「思い知つたか、しばらく残りの五十回は預かりとするが、今後また軍務をおろそかにするようないふことがあれば、それだけでは済すまさぬぞ」

周瑜はなおも黄蓋を罵ののりながら、奥へ入つて行つた。

諸將は黄蓋を助け起こしたが、皮は破れ肉は爛たれて、血が噴き出しており、自陣に歸つたあとも、何度も氣を失つた。見舞いに行つた者はみな涙を流したのだった。

(※魯肅は諸葛亮をおとずれ、今日はなぜ口添えされなかつたのかと聞きます。諸葛亮は、周瑜が「苦肉の計」で曹操をあざむこうとしているからだ、と答えます。ここで魯肅は、は

じめて「苦肉の計」に気づきますが、諸葛亮は、自分がこの計略を見抜いたことを、周瑜には言わないよう念をおします。その足で魯肅が周瑜に面会すると、周瑜は、諸葛亮はどう思っていたかと尋ねます。魯肅は、諸葛亮は周瑜がひどいことをすると言った、と伝えます。周瑜は喜び、今回は諸葛亮をだませたなと言います。魯肅は内心、諸葛亮の洞察とうさつの鋭さに驚嘆きょうたんしますが、口には出しませんでした。)

諸将が次々に見舞いに来たが、黄蓋は一言も言わず、ただ長いため息をついてみせるだけだった。そこへ、参謀の闕沢かんたくが訪ねて来たので、黄蓋は部屋の中になかに招き入れ、左右の者を下がらせた。

闕沢は言った。

「今日のことは、『苦肉の計』ではありませんませんか」と闕沢。

「どうしてわかったのか」と黄蓋。

「公瑾どの様子から、察しがつかしました」と闕沢。

「私は孫氏三代にわたって厚い恩義を蒙こうむりながら、何のご恩返しもししていない。それゆえ、この計略で曹操を打ち破ろうとしているのだ。私は苦しい目にあっても、何の恨みもない。貴公は忠義な心の持ち主だから、これを打ち明けたのだ」と黄蓋。

「私に打ち明けられたのは、私に降伏の文書をとどけさせようと、お考えになったためではありませんか」と鬪沢。

「実はそうなのだ。承知してくれるか」と黄蓋。

鬪沢は喜んで承諾した。

(解説)

黄蓋は、孫堅・孫策・孫権の三代に仕えた呉の宿将で、風貌に威厳があり、兵士に思いやりをもって接したため、兵士達は命をふるって戦ったといえます。「赤壁の戦い」では投降を装い、みずから火攻めの先頭に立つて曹操軍に突入します。

黄蓋が曹操に偽って降伏するのは史実ですが、ここにフィクションの「苦肉の計」を挿入して迫真的演出をします。

「苦肉の計」とは、兵法三十六計のうち第三十四の戦術で、人は自分で自分を害することはしないと普通心理を逆手にとって、自分を害して人を欺く計略です。

黄蓋が公然と周瑜を罵倒し、周瑜から鞭打ちの刑に処せられ、これを恨んだ黄蓋が曹操軍に投降を申し出るといふものです。

魯肅はこれを見抜けず、諸葛亮に言われて、はじめて周瑜の真意がわかります。しかし諸葛亮から口止めされた魯肅は、これを周瑜に伝えなかつたので、周瑜は、今度ばかりは諸葛亮を出しぬいたと喜びました。

そして、鬮沢は黄蓋から曹操にあてた手紙をもって、曹操のもとに赴きます。

曹操は、この手紙に疑いを抱きますが、おりしも、蔡中と蔡和から黄蓋が罰せられたとの情報が届いたので曹操は疑いをときます。こうして、黄蓋の偽降工作は成功します。

史実での鬮沢は、孫権に招聘しょうへいされた学者で、特に曆学れきがくに詳しく、他にも經典の解釈が問題になると、孫権は必ず鬮沢に諮問しもんしたとあります。陳寿は、「一代の名儒めいじゆであつた」と評しています（『三国志』鬮沢伝）。しかし「赤壁の戦い」には関わつた史実はありません。

『三国志演義』では、黄蓋からの手紙をもって、曹操のもとに行つたことにしています。

曹操はそれでも一抹いちまつの疑念が晴れず、様子を探るため、先にしくじつた蔣幹しょうかんを再び周瑜のもとに送り込みます。周瑜はこれをチャンスと、今度もまた蔣幹を利用して計略をたてます。

○ 龐統の登場

龐統、字は士元しげん。荊州南郡襄陽なんぐんじょうようけんの人で、「臥龍がりりゅう」の諸葛亮に対して「鳳雛ほうすう」と称せられました。司馬徽しばきに、その才能を認められたことで名声が高まり、はじめ周瑜に仕えました。のち荊州を支配した劉備に仕えます。諸葛亮と魯肅は劉備に、龐統を重く用いるよう薦めています。陳寿は龐統を、「経学と策謀にすぐれ、荊・楚その人たちから才能ひいでた人物とうたわれた」と評しています（『三国志』龐統伝）。しかし、「赤壁の戦い」に関わった史実はありません。

『三国志演義』では、龐統も諸葛亮・黄蓋と同じく、周瑜に火攻めを献策けんさくしています。その際、敵の船がバラバラに離れていると火攻めの効果はないので、曹操に船と船とをつながせるように仕向けなさいと言います。そして、龐統はその役を買ってでます。周瑜は、再びやってきた蔣幹を利用して、龐統を曹操のもとへ送り込もうとします。

蔣幹がやって来ると、周瑜は怒ったふりをして、彼が手紙をぬすんで曹操に見せたことを責めて、わざと山の庵室あんしつに閉じ込めます。

（本文抄）

蔣幹は庵のなかで、あれこれ思い悩み、眠ることもできなかつた。

その夜は満天の星空であり、一人で庵いおりの裏へまわつてみると、本を読む声が聞こえて来た。

岩陰いわかげに間口数間の草葺きの家があり、灯りが漏れている。のぞいて見ると、一人の人物が剣を壁にかけ、灯りの前で「孫子そんし」「吳子ごし」の兵法書を朗読ろうどくしていた。

蔣幹が戸を叩くと、その人物は門を開けて迎えに出たが、いかにも俗人ぞくじん離れのした風貌である。

蔣幹が姓名を問うと、その人は答えて言った。

「姓は龐ほう、名は統とう、あざな土元しげんです」

「鳳雛ほうすう先生ではありませんか」と蔣幹。

「そうです」と龐統。

「ご高名はかねてからうかがっております。どうして、こんな人里離れたところにおれるのですか」と蔣幹。

「周瑜はうぬぼれが強く、人を受け入れる度量どりょうがありません。そのために、私はここに隠れ住んでいるのです。あなたはどなたですか」と龐統。

「私は蔣幹です」と蔣幹。

龐統は屋内に招き入れると、蔣幹は言った。

「あなたほどの才能のある方が、どうしてこんな所に身を置かれるのですか。もし曹操殿に身を寄せる気持ちがおありなら、私がお引き合わせしましょう」

「お引き合わせいただけるなら、今すぐお供ともします。遅ければ周瑜に知れ、面倒なことになります」と龐統。

そこで、龐統は、蔣幹とともに夜中に山を下り、舟を捜し出して、長江の北岸に向かった。曹操の陣営に到着すると、蔣幹は一足さきに曹操と会い、これまでの事をつぶさに報告した。曹操は鳳雛先生が来たと聞くや、みずから陣幕の外に出て迎え入れた。

曹操はたずねた。

「周瑜は青二才あおにさいのくせに、自分の才を誇つて人を侮あなぢり、人の意見を聞かないとか。わしは、かねてから先生のご高名を耳にしてきたが、おいでいただいたうえは、どうかご教示きょうじをいたしたい」

「私がかねてから、丞相は用兵ようへいの法にすぐれておられると聞いています。陣立てを拝見させていただけないでしょうか」と龐統。

曹操は、龐統を水上の陣營へ案内した。

見れば、南に向かつて二十四の水門を設置し、水門ごとにもうどうかん蒙矐艦（突撃艦）と戦船をずらりと並べて城郭じょうかくのようにし、内側で小さな船が往来するなど、まるで街路のようであった。

龐統は、感心して言った。

「丞相の用兵がこれほどのものとは、聞きしに勝るものです」

そこで南岸を指さして、「周郎よ、おまえの命も長くないぞ」と言った。

曹操は大いに喜び、ともに酒を飲みながら、用兵の機微きびについて語り合った。龐統は弁舌さわやかで、その応答は流れるようだった。曹操はますます敬服し、丁重にもてなした。

と、龐統は酔ったふりをして言った。

「失礼なおたずねですが、軍中に良い医者はおりますか」

曹操がなぜかと聞くと、龐統は言った。

「水軍に病人が多いようですから、良い医者に治療させねばなりません」

そのとき、曹操軍はこちらの土地に慣れないために、嘔吐おうとをもよおす病にかかり、多数の死者が出ていた。曹操はちようどこのことを心配していたところに、龐統の言葉を聞いたものだから、問わずにはいられなかった。

龐統は答えて言った。

「丞相が水軍を訓練なさっている方法ははなはだすぐれておりますが、残念ながら万全ではありません」

曹操が繰り返してたずねると、龐統は言った。

「私には、水軍の病気をすべてなくし、楽々と勝利をおさめることができる策があります」
曹操は大いに喜び、その妙策を教示してもらいたいと頼んだところ、龐統は言った。

「長江には、潮の満ち引きがあり、風波もやみません。北方の兵士は船に乗ることに不慣れですから、船が激しく揺れると病気にかかるのです。大小の船を組み合わせ、あるいは三十隻を一組にし、またあるいは五十隻を一組にして、舳先と船尾を鉄の輪でつなぎ、上に幅の広い板を置いたならば、人間はむろんのこと、馬でも歩くことができます。こうして進めば、どんな風浪があっても、なんの心配もなくなります」

「先生の良策がなければ、呉を打ち破ることができなかつたでしょう」と、曹操は感謝して言った。

「浅はかな思いつきです。どうか、丞相ご自身で判断ください」と龐統。

曹操は即座に伝令を出して軍中の鍛冶屋かじやを呼び集めると、連日連夜、鉄の鎖を造らせ、船

をつなぎあわせた。各軍の兵士はこれ聞き、喜ばないものはなかった。

(解説)

龐統は曹操に「連環の計」すすを薦め、曹操もそれは名案と受け入れます。こうして、曹操軍の船団は、鉄の鎖でつながれました。しかしそのとき、曹操陣営に「連環の計」を見抜いた人物がいました。それはなんと徐庶でした。徐庶は、母が曹操に拘束されたため、やむなく曹操に降りましたが、母が憤激して自決したので、曹操のために献策はしないと誓っていました(第九回「劉玄德三たび草廬を顧みる」そうろ かえり)。徐庶の「私は一生、曹操のためには尽くさない。きみの策をあげたりはしない」との言葉にホッと胸をなでおろし、周瑜のもとに戻っていきます。「身は従えども心は従わず」です。

こうして、数々のけんぼうじゆつず権謀術数が乱れ飛びます。

金文京氏は「(中国を)東北の一隅から虎視眈々とねらっていた満州人は、『三国志演義』を満州語に訳して、配下の武将たちに読ませていた」(『三国志演義の世界』、東方書店)と指摘されています。中国を征服して清朝しんちやうをたてる満州人は、当初、將軍が軍隊を率いるときは、難解な書物ではなく、『三国志演義』を参考にしていたのです。

清朝第二代皇帝のホンタイジは、明へ間諜（ス。パイ）を送って宦官を買収し、明の名将袁崇煥が謀反しようとしているとの噂を流し、明の崇禎帝を欺いて、袁崇煥を殺させることに成功します。これなどは、まさに『三国志演義』の「反間の計」を地で行く権謀術数です。前回の、曹操が周瑜の計略にひっかかって、蔡瑁らを殺すという策略そのものです。

袁崇煥が健在であれば、清の軍隊が山海関を突破して、簡単に北京に攻め込むことはできなかつたはずです。

毛沢東も子供時代から『三国志演義』を愛読していますので（『中国の赤い星』、エドガー・スノー、筑摩叢書）、そこから戦略を学びとったことでしょう。